

「東と西の融合」

4/8 (水) 1:20~1:50

(30分 同時通訳)

於：東京国際フォーラム

森 英恵 氏

〔前置き〕文化勲章を受章して

- ・ファッション（洋服）は、西洋の長い歴史の中でつくられてきたもの。
- ・その西洋のスタイルをライフワークとして、人々に助けられ40年走り続けてきた。
- ・日本でファッションがやっと「生活文化」として認められたことを、大変うれしく思う。しかし、これは年をとらないとだけいけないものなのでは。

1. 私の歩んだ道 (日本人、日本の女として)

- ・パリのシャネルの店での体験
1961年、初めて渡仏したとき、シャネル店でシャネルスーツをつくったエピソード。「あなたの黒い髪には、太陽の色が似合う」とオレンジ色をすすめられて困った。日本では控えめが美德とされるが、向こうでは個性を目立たせることが大切だという文化の違いを認識した。
- ・初めての海外のショーで表現した日本
1965年、ニューヨークでショーの成功。
EAST MEETS WEST——「東と西の出会い」と絶賛を受けた。
「目立つ」こと、違いを強調するため、「違い」とは何かを真剣に考えた。
それは、自分のルーツ、アイデンティティの確立である。
- ・1977年、東洋人として初めて閉鎖的なパリ・オートクチュール組合に加入。
- ・私の蝶は日本の蝶
今では、蝶は私のシンボルマークのように世界で言われる。
初めて訪れたNYで観たオペラ「マダム・バタフライ」では、蝶々夫人は哀れな日本の女として表現されていた。それ以来、「私はこの蝶々夫人のイメージを絶対に変えてみせる」と心に決めた。
1985年、ミラノ・スカラ座で「マダム・バタフライ」のコスチューム担当。
私の蝶への思いがやっとふっきれた。

2 ファッションについて

・ファッションは時代の風

ファッションはかつては人間同士が誘惑し合う動物的なものだったが、時代とともに洗練されて、人間はどう生きるべきかの提案へと発展してきた。しかし今、おヘソを出したりするなど、再び“着る”というより挑発するムードが強調されるようになった。世紀末のせいかもしれない。

・ファッションは国境のない仕事

ファッションは早くから国境のない仕事だが、最近インターネットなどの発達で、ますます地球が狭くなった。

・手仕事の大切さとコンピューター

コンピューターが普及し、私のスタジオにも入って便利になった。やがてコンピューターが人間の仕事を奪い、ライフスタイルも変わるだろう。

しかし、手の仕事は大事。日本の文化は職人文化、伝統をふまえて受け継いできた世界。手づくりにはしみじみした趣き、深みがある。

これからも人間の手を退化させないように。

3 人間と科学の共存、バランスこそキーポイント

・21世紀は科学の世紀。人間の生きざまと科学のバランスが問われる時代

20世紀、人間は物の追求をし、自然や環境を破壊してきたため、石油の埋蔵量も先が見えてきた。天然ガスにも限りがある。その反省を21世紀に生かす。

・これからは地球規模で、地球人として暮らすことが大切

・東と西の「出会い」から「融合」へ

ファッションは世界の共通語。フランスで受けたものは、ロシアでもアラブでもアジアでもどこでも受ける。

手づくりの文化を大切に、ファッションという創造を通して、「東と西の融合」をテーマに地球環境へのやさしさを表現していきたいと願っている。

ファッションは平和な時代の中でしか生まれえない。戦争中は灰色とカーキ色の世界。日本は今ではそれほど自慢できることもないけれど、どこへも武器を売っていないことを誇りに思う。平和な社会を築いていきたい。